## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カロリン・フォックス女史とジョン・スチュアート・ミル(三)
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.5 (1923. 5) ,p.796(124)- 812(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230501-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# さジョン・スチュアート・カロリン・フォックス女史

**え**ル (三)

「八四〇年三月十六日 John Stuart Mill は、 病弟 Henry Mill を Falmouth に訪れて以來、 施地に滯在すること約一ヶ月に垂んとする。是 の兩度に抜擢されて、當時東印度會社の文書審 で局主席書記の職にあつたので、彼の長期に亘 る不在は、相當に社務に及ばす所があつたに相 る不在は、相當に社務に及ばす所があつたに相 なない。果せる哉、四月十日彼は、東印度會社と は、一八二八年及び同三六年 があった。是

> Falmouth を引上げたのである。 して倫敦に 歸つ たが、他の 家 族は 翌十 一日記に依れば、John Mill 丈けは此夜直ちに發足

らず。 れは、 じて 準を、彼等の心中に創造するものである。 James James Mill の教育上に於ける理想は、子供達を Stuart Mill に關説した所を左に引用する。即ち Mill は、子供に取て除り容易いこと、 供に與へるにしても、あれやこれやと撰び出し 面白いことを好まなかつた。例へば梅の實を子 れが皮相淺薄であるや否やを批判するための標 して一事を充分に理解させることにあつた。是 「・・・・あの不思議な 程鋭い落著い Fox 女史が、四月十日附の日記に於て は ならぬ。 單に心意に對する好い練習であるのみな 眞理に對する或閃きがあつた。彼の父 又他の問題に對する彼等の智識、 若しさうするならば、 た兩眼を通 又は除り 即ち夫 John

得するに困難なことであるが、 じて子供の時代程物事に順應し得る時はない。 ても子供は何れが甘 さうして困難に打勝つここを致込まなければな 人間の一生は一の奮闘であらねばならぬ。故に ないであらう。多くの場合其效果は、 勉强法は、 史を研究させられた。此幼時に於ける猛烈なる である。John Millは、十八才に滿たずして宗教 人の子には、 でも、若い時代の快活さは、全く早熟のために 『私には全然子供の時代がなかつた。クリケ され勝ちになる。 磁はれてしまひ、さうして若々しい活動も反省 らないであらうし、又假令其效果が見えるとし しないであらう。 叩ち此筆法が、James Will の採用した所 恐らく John Mill と雖も他人に薦め 其子供の時代に、勇敢に奮鬪し、 現に John Mill 自身ですら、 一體子供に取て、技術は會 4 かを見分る力を容易く會 人間の一生を通 充分學が

(七九七)

カロリン・フオツグス女史こジョン・スチュアー

第五號

然の途を歩まい 依れば、佛蘭西に於ける現時の感情の調子は、電 何なる論文に於けるよりも彼の性質を着色させ 階級の間に於ける一大進步的變化を指示して居 に思想家の間のみならず、又最も有力なる中産 て居る。 易である所のことを熱心に追求するに在る。彼 3 等の最初の意見、 して非常に興味を覺えさせたのである。 の命令を信ずてう抽象的原理に於て正常である 所となり、 よりのみ吸收したものは、今や彼等の抛棄する 佛蘭西に關する論文に於て、Mill は、 彼等の到達した點は、善であり真であり不 けられて居る。共和政體は、假令人は自治 即ち佛蘭西に於ける彼の見聞は、彼を 夫れは未來永刧佛國人に適應するも さうして彼等の心意は熱心に眞理へ せいしいるいたい 方。こ、 即ち彼等が單に傳統と偏見と が宜しいこと云つた。ことがない。天性をして 天性をし てい 自、

のではなからう。

(七九八)

を繼續するよりも寧ろ夫れに倒れる。さうして 然るに佛國人は、彼等自身の信仰の確實性を信 命以前の佛國とは、多く同一の狀態にあつた。 gement)てう方法に於てなされなければならな 物を望む。故に英國に於ては、 大戦爭を有すると考へる。そこで或者は、 子を食ふ以上に望む』人は、皆彼が成就す可き ない。Carlyleの言葉を借用すれば、『自己の菓いから、敢えて意見の相違を責めることが出來 じたので、他人を責める保證があるものと思つ 步が認められる前に 心意的擴大 (mental enlar monarchy) いべっ ならぬこすれば、 いここが多い。Charles 一世時代の英國と、革 體佛國人は、多く人間を望むが、英國人は事 之に反して英國人は、確かに信ずる所がな 今佛國人は指導者に從はねば 將來に於ける政體であらう。 選擧に基づ~王政 (elective 何等か著し 奮鬪 い進

を雖も、 若くは書物が、夫れを熱心に探求する人に對し 長い間不安の狀態を繼續するけれど、其不安の 己非難に赴かせる。 で繼續することは特有である。 ひなき指導を有するものである。そこで或者は、 彼等の正義の観念は、 **興理を知ることが** 地球と時間とに束縛される限り、人は完全なる きさへすればい に對する別異の見地に到達するのである。 齎らすものである。 眞理を解き明かすに不思議な、< 明確なる信仰や、平和なる良心等を往々 完全に真理を知るものではない。否、 肉體上の疾患の場合を除いて、終局ま 彼自身の胸裡の神殿に於て間遠 出來ないのである。 何人と雖も、若し待つて聽 此過程に依て各人は、 如何にも彼等を導いて自 此點に於て賢友 又愉快な效 興理

次は米國の問題である。Millは、米國に於て 和政體の實驗が試みられて居ることを感謝し

て居る。 興論とが缺けるからである。米國は興論丈けに 久に失敗せねばならない。 從ふ。さうして米國に於ける輿論は、 るに必要である所の二個 體の場合には、 動力 と同様なことが行はれる。是等二個の對抗的原 なれば、 重要なものである。 其結果は大なる同一さと云ふことになる。斯 あるから、 |殊的典型(即ち大統領)に賛成して決定するの て米國には、 夫れが過度に存在する時は、 (即ち輿論と専制)は、國家の福祉に取て 善が悪どなる。 た人間と同様に、 夫れは、總ての我儘な、抑制されない、 し夫れは、 總てが輿論への接近を目的とし、 常に事物を適當の順序に整頓 其過程に於て、凡俗に所謂專制 若し何れか、優勢なものと 失敗である。 の對抗力、 甚だ厄介なもの こな 何故と云ふに共和政 其性質を一變 即ち政府 さうじて 性格の

> の事は、人の首を絞ることであるこ考へて居 して Carlyle を同じく、 死刑に對し τ Mill は 人を以てなし得る最悪 反對者である。 さう

17 o Henryの墓石には、何等の顔詞もなく、 Clara Mill をは、Henry の嘉察に赴いた。 私に約束した所の芳香の曆は、左の如く作製さ 彫刻してある丈けである。豫ねて J. S. Mill が 碑文もない。唯だ『ヘンリー・ミル、享年十九』と 此日偷敦へ出立するに先立つて John Mill と 一字の

## 学 9

は夏の半ばで終る。 月より十月ま (Linnæus 然の美はしい色取は、絶えず變化して 等の各種植物目錄を模倣す)。 で繼續す。併し自然の芳香 三月より七月までは、

(七九九) 銯 カロリン・フォックス女史とジョン・スチュアー 第五號

総名が繼續して、整さなく夜となく、空中に芳香が漂ふ。併し秋の芳香は、��表に於て、春の芳香を省略したと同じく、探して後求めねばならないから、省略した。故に芳香の暦は月桂樹に始まり、シナノキに終る。

三月——一般の月桂樹。

四月――菫菜、ハリエ=シダ、ケイラン草、一般の蕨葉柳、林檎の花。

月——紫丁香花、紫羅爛花屬(夜跃)、

キバナノバタザラ扇(夜珠)、キングチリ、山櫨、セリンガ、野

操發

六月---米犀草、豆畑、各種の夏薔薇、

乾草、葡萄牙月桂樹、各種の石

名國。

七月――普通のアカシア、繡線薗殿、忍が、重輝帆金驤、隠爪、シナンキ

儿

る。即ち 大日附にて東印度會社より差出されたものであい。見 Robert Barclay へ宛た John Stuart Millは、兄 Robert Barclay へ宛た John Stuart Mill の長い手紙を引用してある。其手紙は、四月十二十六日記の日記には、 Fox 女史

「私の親愛なる友、――貴君は私に斯る同輩のでは、貴君の深切な同情ある書信を頂いて大變愉快でした。吾々を後に残して去つた彼(Henry Mill)に就ては、既に私が申した事以上に何か中すのは、無駄です。彼の赴いた所へは、吾々も程なく行かなければならないのです。彼に就て考へることは、現在此處に在るので、將來も亦て考へることは、現在此處に在るので、將來も亦て意へることは、現在此處に在るので、將來も亦は。

「私の親愛なる友、――貴君は私に斯る同輩の常な印象を殘す底の如きものであることが、先

第十七卷

(八〇二)

雑

力口り

晩秋に遅走せの芳香草がある。名付けてハンショウグルを云ひ、田舎家の外壁を飾るものであるが、折角の連續線を切斷するから、近孤立物は芳香の暦より除外される。親友 J. S. Mill.

Caroline Fox 女史へ

Cunningham が J. S. Mill の肖像を見せたが、 地忍的理想を以て膨脹し、其顔は、頗る優雅に 地窓的理想を以て膨脹し、其顔は、頗る優雅に 大變奇麗であつた。其理想的の頭は、如何にも

欄する記述はないのである。 Mill に關說した所は、以上に盡るが、其後暫らMill に關說した所は、以上に盡るが、其後暫ら

ス女史でジョン・スチュアー 安なることに就て、常套に云はれる總ての眞理 which no while it is called to-day; the night cometh と云ふ日に働け、今に働けない夜が來る』(Workにあるものです。即ち私に取て其敎訓は、『今日 の一部分を仕遂げて、 て居るのは、 居た所の或人を失ふ迄、先づ一生の短くして不 誰でも、彼が一生の友として運立つのみならず、 身のより特殊的指導のため引出す或教訓が、 又死後に於ける後繼者として殘さうと希望して 來事が呼び起す様々の嚴肅な感情の中には、 々に最も印象を與へる或物、 づないと申して差支へありません。 もなす可含總ての仕事を有する人は、 の如く『私の使命を傳へた』人には、誰で 意義
こを
充分に
感知して
居ない
ものです。 man can work.) を謂ふのです。 何故であるか。 幾分かでも Carlyle の常 第五號 即も何人でも彼自 且私が、私の仕事 斯の如き出 努力し ä. 吾

(元0三)

ません。 に思は さすれば, 短い時でも幸福と道徳的善この源泉とな 如何なる瞬間の唯一の問題も、『其日 唯た一日としてのみ現はれ、而も吾 なされ得る場合に於てのみ、達成され得 其無爲の儘にてなされ あります。 を推測するだに、吾々の智慧の遠く及ば も其儘にして置いた 15 かしと云ふに盡ることでせう。 信條の變化に ます。 假令其源泉が極めて狭い範圍に限られて居 れます。 彼の殘りの生涯を浪費するものではあり の如く吾 併し茲に唯一の平明なる人生の準則が 夫れは、永久に人生を束縛し、 其目的は、 併し潜しも此中に何等 少なくこも吾々の知つて居るこ 關係なく、 々もある其日には、 のはい るよりも、 唯だ彼の殘りの生涯が 又其信條を解釋す 何放で 勿論、 逝 ある 古は浪費されば、全生涯は かに有用 的がある 如何に るやう ぬ所 る人 凡ゆ 3 1 で

> なせ』(Try thyself なせ』(Try thyself faculties and outward ciscumstances being the highest thing thou art capable duly considered, and then Do it.) や』(Try 出す迄、倦まず努力せよ。然る後夫れを正しく考慮して、汝がなし得可き最高のす。夫れは斯うです、――『能力を外的狀す。夫れは斯うです、――『能力を外的狀 thyself unweariedly till thou of doing, findest をこの、状、る

果は、夫れに動かされるのでは 返されるのは、 私の主情は斯りで の賣残りの贈物なごは、 、関讀を期待すると正直に申すにしても、 寧な感謝の言葉を喚起すことの出來るもので 貴君が嘗て私の獲稿に就て申さ ありません。且又私は、 の威情を抱かれ 大變深切です。古い定期刊行物 たてこでせう。之に關 何うしたつてあん 貴君に多かれ少かれ 君は或執筆者に なくして、 れたことを繰 先づ 其結 なに T

るか 處に在るのです。 に取て愉快であらう
こ思
ひます。 に闘する限り、 貴君の感情を判斷すれば、 物に注目して、彼等が如何なる種類の人物で 聞きたさら .も知れないこ考へて、頗る勝手な愉快も其.哩も隔つる友達ミ談話を交へて居るのであ かを想像することの出來るのは、屢々貴君 T 稀れではあるが時でして、私は 而し て私自身の考 彼等執筆者の 私自身の論文 ^ 書いた 、に依て

せう。 するも、 みならず、 注入し勝ちです。否、 吾々へボ著述者は、 の、 中、 い時に限りますが 故に何んでも真に好まれやうと欲する、完全に若くは明白に吾々から出ない。 何人でも賞讃を博さうと思ふのは、 にあるならば、 吾々の最善の感情をも吾々の論文中 (元〇三) 單に吾々の最善の思想の 他の如 少なくこも若し事物が 一吾々の論文が、 τ 胩 で

> て利益です。 自身よりも、 知られ るのは、 関々吾々に取

ン・フォックス女史とジョン・スチュアー して、 びた骨を生かせることが出來ませんでした。 る限りし を以て あります。 Radical party) し見事に失敗しました。 ませんが、 であつて、 に夫れを排げませう。 るでせう。 倫敦に居られる間に、二州の小本に収纒められ 値に對する口 私の是等特殊的論文に於て、 多くの失敗の中には、 私は夫れを知つて幾分滿足する所があり 現時の人々を所謂哲學的急進派(theが、夫等の論文に於て私は、多大の苦心 私が Durham 卵を敷つたと云ふことで 其唯一の質例は、 何人に取ても今は殆 而して私は、 質を有するものは、 へ引入れやうど試みました。併 残り N 貴君に對して最も愉快 確かに成功したのも の論文は、 第五號 斯
う常に
云は
れ得 即ち夫等のひから んざ質値があり 何等か永久的 總て、 専ら政論 勿

ます。現に て政治學の原則上常に考へ及ばな 確信を以てすれば夫れは、 總ての人が、Durham つたのです。 様な陳述を支持するものが何であるかを疑はれ **貴君が其論文をお讀みになれば、文中に於て其** るでせう。 かと云へば、夫れは最近公表された貴下 より歸國して受けた歡迎は、抑も何に起因する して斯う申しました、『余 (Durham卿)が すら 彼等は、 の辯解をする位が闘の山でした。 何人も敢えて卿のために一言すら辯じなか の論文以外に何も **一引込んでしまうか、若くはホンの御座** 併し其公表當時は萬事斯うでした。 Durham 卿自身は、 從來彼に盛に阿り諂つで居た其人 彼等の嘗て期待しなかつた偶發 勿論私は決して追從しませんでし 卿に反對のやうに思はれ 知りません』と。若し 卑怯からではなくし 大變私に感謝 かつたくめ 併し私の 加奈陀 (J. S.

私を除い 卿の報告書が公表されました。此時に始めて世 のです。 扨て私が挑戦して三四ヶ月を經ると、 ち其間 出來事に不意打ちを喰はされ、而も彼等の支持 せんと欲する人々 者が、其危急の場合に挑戰し、單なる釋放の代 ど事態を動かすことが出來なかつたでせう。 常に强く卿に反對して、 す可らざる或事に關係するのを恐れてしまつた 題に疑を 12 卿は見捨てられた人となつたでせう。 卵に賛して 卿のために名譽と光祭とを斷乎として要求 私の正しかったことを口にしました。 題に對する意見と知識さを證明し得る或 て之に當る者は、先づなかつたらしい。 若し是れが進行したならば、 Buller共著の立派な報告書も、 けいさい <u>\_\_</u>の せて置かなかつたならば、 を激励し、 索制運動をなし、 遂には 以て人心をして其 Durham 卿に聲援 Durham 興論は非 卵及 殆ん

成功を確實にしました。 家を驚かし、 を與ふ可しと論じて、氣早に非難するへば批評 やうに思はれました。そこで私は、最初に評論 甚だ難解のものでしたから、果して夫れが成功 世人の大多數に取て頗る未知のことに屬し、又 するか否かは、 を大いに速めたことにあります。 二の成功は、 成功したと斷言し得る僅か三論文の一です。 是れは、 先きに喇叭を吹き、 私が人物評論を試みた以來、私自身 Carlyle 公平に取扱はさせ、斯くて其著の 一に骰子の轉向に依存して居る の『佛蘭西革命史』の成功 最高の天才たる榮譽 彼の著書は、 第

がなく たことです。其結果途に世人は、次第八 私の第三の成功は、 Guizot が大思想家であ 大著述家である次第を、世人の耳に響かせ の著作を讀むやうになりました。併し私 英國人は Gwizot を讀むやうにな 12

> 於てなした程に多く、今迄に於ける私自身を申 私は、貴君の御家族と私との交際した敷週間に 界に關する完全な記述であると思ひます。 るであらうとは、私に信じられません。 何卒私の手紙に於ける自慢をお宥し下さい 以上が、 私の編輯と評論とより得た總て の世

観的。よ して、 7 と、私は考へますし、又私は、今度貴君にお會 らです。 ひする場合に於ける非常に 重々しい所を變じ 何故なら多く の人は非常に 遠慮し て居る もの 上げたことは、本當に他に思ひ當りません。併 し夫れは、よもや私の缺點と申されますまい。 、——Calvert'醫師の申した如~——より客私の會話に於て、過日御面談致した時に比 り非主視的たらしめるやうに致したか Calvert 圏師の申した如く

J. S.

カロリン・フォツクス女史でジョン・スチュア 第五號

(ibid., pp. 90-94)

(八〇五)

雜

鍅

三三三

## +

Fox 女史の日記は、再び暫らく J. S. Mill には、倫敦を訪れたものである。此日の日記に女は、倫敦を訪れたものである。此日の日記に依は、倫敦を訪れたものである。此日の日記に依て、女史は Thomas Carlyle 崇拜者に Carlyle 熱を煽られた所へ、彼の「券狀主義論」(Chartism, 1839)に刺戟されたものから、偶々倫敦に開かれた彼の「英雄崇拜論」、Heroes and Hero-Worship)の講義へ出席するために倫敦へ出向いたものとの講義へ出席するために倫敦へ出向いたものとの講義へ出席するために倫敦へ出向いたものと

叙せる講義の模様なぞ、今は省略する。 Harrietを伴つて出席した。其席上 Harrietの紹開かれたものである。女史は、J. S. Mill の妹開かれたものである。女史は、J. S. Mill の妹

語談を終って、Fox 女史等は、Kensington Square の Mill の住家へ戻つた。丁度 Mill は、食事中であつた。其邊で女史は、小さい庭を散歩すると、Clara の愛好した Falmouth の植物や、Henry の仙人掌や、其他可愛らしい追憶とや、Henry の仙人掌や、其他可愛らしい追憶となるものを見た。

大れを讀む間興奮して聲を震はせて居た。又採集した押葉押花を見た。彼の母は種やなものない配した。其處で彼は「衣裳哲學」(Sartor Resartus) の有名な文句を讀み聞かせた。夫れは、George Fox に關する所であつたが、彼は来の母な達は、John Mill の書齋へ導かれて、彼の母は種やなものが、日本ののので、John は私達が迷惑をしないかとなるので、John Mill の書齋へ導かれて、彼のと記述は、John Mill の書齋へ導かれて、彼の

Grote 夫人の風變りな點を二三話したが、是れな)と云ふ語の起源である。夫れより種々なな)と云ふ語の起源である。夫れより種々な時卿かも差控へる必要はありません』と云つたが、如何にも彼の評論は是れを證明して居る。 Mill の母は、私遊に Bentham の愛好したお菓子を出した」

に就て語つたが、其要旨は左の如くである。 Park を散歩した。其途次 Mill は John Sterling

に努めたが、長い間其結果は、求められなかつなける總ての美はしき特性と優雅との所有者で於ける總ての美はしき特性と優雅との所有者で於ける總での美はしき特性と優雅との所有者で

るしと。 れざい 作は、 を他人に會得させると云ふ稀有の力を有つて居 話の中に彼の最善の思想を注入し、以て其思想 法であるかも知れぬと覺つた。夫れ以來彼は、 12 原則を打建て、之を宣傳する方が、 であつたのである。 興面目であつたが、 西印度に於て忍耐し、辛抱し、熱心になり、又 れは、彼が西印度より歸國す迄繼續した。彼は、 ふ意味に於て、不安であり、不幸であつた。是 **半静となり、** 此時代を通じて彼は、 彼の會話に劣る所がある。元來彼は、 總ての人の價値を増す底のものであるけ 満足を得て居るのである。 彼の著 夫れに報いられる所は充分 即ち彼は、行爲の健全なる 夫れが出來ないと云 自己の利用

ス女史こション・スチュアート・ョル 第五號 一三五字派の精神に及んだ。此點に於てクェーカー教会がの精神に反對し、之を亡ばすものとしての最後に Fox 夫人と John Mill との話は、基

七卷 (八〇七) 雑 録 カロリン・フォツクス女史さジョン・スチェアート・ミル

のででの う。是れが、所謂宗派の精神であると。 (ibid, 少ない。併しクューカー教に限らず總ての宗派 と相違さが、其一致に勝ることは、勿論であら と相違さが、其一致に勝ることは、勿論であら と相違さが、其一致に勝ることは、勿論であら と相違さが、其一致に勝ることは、勿論であら と相違さが、其一致に勝ることは、勿論であら

British (the Westminster Abbay を云ふ)に出掛 折角の好機を失ふのを恐れて、 the Pantheon of 此日 Finsbury に於て女史は、Calvert 醫師に出 二十八日女史は、再び倫敦へ立戻つたのである。 記は 置つたので、 の日記は、Uptonに於けるものである。 及び二十三日の日記が省略され、二十二日の日 訪れた。 社附属の博物館を見物した。夫れより一同は、 Fox 女史の日記には、五月二十日、二十一日 Mill に關説せず、二十四日乃至二十七日 女史等は、Mill に案内されて東印度 遊立つて J. S. Mill を東印度會社 斯くて

ば、して國民性の相違を論じた。即ち Mill に依れして國民性の相違を論じた。即ち Mill に依れけた。此處で Mill は、興味ある研究の對象とつな其とジョン・スチュアート・ミル 第五號 一三六

する 故に多少なりとも主義を有する人物は、 國人は、他國人より速かに總ての新機軸を採用 於て確かに幾人かの弟子を集められる。 して普遍的熱心を鼓吹することは出來ない。 方英國に於ては、慣習と與論とが支配者である。 國民と共に何事をも成就することが出來る るが故に、若し其指導者が有能な人物であれ 然るに佛國人は、特に一人の指導者に支配され 彼自身の途を歩み、 國人に共通な著しい資質がない。 の偉人は、 佛國人である、 「佛國人は、 けれ 何は兎もあれ、總て本質的に一個の 失れが佛國人の獨創であることは 種々の國民性を有して居る。佛國 他方英國人の個性には、特に英 彼自身の功績が後に從ふ。 即ち各人は、 併し決 英國に は

少ないが、併し共勇氣ある者は、 是認せざるを得ざるからである。從て新生活然らずんば、英國人は、從來無爲に生活したこ にして、 何等の面 領上實際的であり。 に思辨的國民である。 次に獨逸人に取て、 ある時にはり 甚だ少な 生の行為と道德上の本分とに關係させるが改 總ての新學部は 新らしき眞理に臆病である。 目録に ce novo)を始める勇氣のる者も、 夫れを先づ變更する位に留めて、 倒をも惹起せぬが故に、 歐羅巴全體に逆輸入する。 7 一つ附加はるに過ぎない。 彼等は知らぬ振をするのである。 而して佛國人は、 人に取て餘り深奥なる問題で 又彼等の思辨的見解を概ね 或思想は、彼等の思辨的真 佛國より來るのである。 他方英國 人は、彼等の本 失れを充分稀薄 何故と云ふに 彼等は本質的 斯くて殆ん 即ち獨逸 極めて 殆んど

れる所があるのである。 兎に角獨逸人は、今日最も寬容な國民である、何故と云ふに、彼等の記人は、總ての 者を呼ぶ に、彼等の 半神半人(demigod) の上に漠然たる方法に依てとも何等の光明を與へる兄弟を以てするのである。斯れば獨め大け、與下の上に漠然たる方法に依てとも何等の治師。 東京外があるのである。 兎に角獨逸人は、今日(ibid., pp. 103-104)

同情の切願に基づくと斷じ、次の輿論の恐怖が 型五月二十九日の日記に依れば、Fox 女史 は、W. E. Foster、John Mill 及び彼の弟妹、 に花を咲かせた。此日も Mill が、談話の中心 人物であつた。先づ彼は、是認の愛情(Love of approbation)が人事に影響する事實を以て、 のf approbation)が人事に影響する事實を以て、

ス女史さジョン・スチュアー

第五號

一三七

ス女史とジョン・スチュア

は、より高い教義を古典的書籍に求めた所、僅聲と信用とに對する大道であつた。其處で Mill 曰く「同等の人物と戰ふは、劣等の人物と爭かに Thucydides の中に一句丈け見出した。 義務を教へたが、希臘人の間に於ては、力が名 なかつた。勿論基督敎は、先づ弱者の保護でう 土道がなかつた。 謬に基づき得るものではないと論じた。 れど、夫等の結論は、事物の本質上、 じて古代希臘人に移る。 こそ、總てが儀式張 ば、吾々は仇敵に四方を包圍されつく生活すて **頗る有用な統率者なる旨を論じた。又彼に從へ** う假定の下に、行動する社會のやうに見えれば も遙かに貴いことである」と。最後に Mill 正しい結論も往々誤謬に依て引出されるけ に於ける黨派根性に就て話した。 故に希臘人は、弱者を保護し るのである。續いて 即ち古代希臘人には武 決して誤 話は轉 30

(ibid., pp. 105-106)

(ibid., pp. 105-106)

(ibid., pp. 105-106)

右は五月二十九日の日記に現はれた所であるが、以下數日の日記は、原本に省略されて居る。 飛んで六月三日の日記は、原本に省略されて居る。 でCharles 夫妻を訪問したと云ふ丈けで、何もMill に關する記述がない。(ibid., pp. 106-107) Fox 女史の日記は、六月十二日迄再び原本に 著略されてある。十三日の日記に現はれた所である 一行は、Mill 等を共に Exeter Hall に開催された

に出席した。出演者は、Prince Consort, Albert, Fowell Buxton, Daniel O'Connell, Sir Robart Peel, Sir Thomas Acland, Guizot, Northampton, 卵 Shaftesbury 伯等であつた。女史は、Guizot が演壇に現はれた時に、彼の顔が嘗て John Mill の言つた「凡ゆる佛國の偉人は、先づ本質的に佛國人である」てう言葉を説明するのに興味を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共味を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共味を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覚えたと云ふ。要するに此日の日記は、共中を覚えたと云ふの。

以上にて Fox 女史の倫敦滯在中の日記は、 原本に打切つてある。原本は直ちに七月十七日 所の Clifton に於ける日記となつて、其間約一 ケ月 省略されてある。七月二十日 J. Wilson Croker が、女史を訪れて雑談の末、話は Mill に及んだ。即ち女史は日記に左の如く記して居

「MIII が宗教的見解を吐露したのは、耳新らんい事である。何故と云ふに数年前まで彼は、全然宗教に反對する偏屈漢であつたからである。J. Sterling すら、Mill は從來決して今日のな。「Sterling すら、Mill は從來決して今日の如くではなかつたと考へて居る程である」と。(ibid., pp. 111-112)

奴隷賣買非認演說會(the Anti-Slavery Meeting)

右の記述支切では何を意味するか不明なる を見い、日記に敍述したものではあるまいか。 を見いの宗教観の變化に驚いた結果、右の如く女 と、私の考へる所では、Fox 女史が、Croker に が関々クェーカー教の美點等を推賞した事 質を知らせたものであらう。而して兩者は、 とは、日記に敍述したものではあるまいか。

が、女史を訪れたと記してある。Bowring の談を編纂して後世有名となれる Sir John Bowring 全集

第十七卷 介二 盤 銯 カロリンのフォツクス女史とジョン・スチュアート・ミル

前五號

p. 113) に陷つて居ると、Bowring は罵倒した。(ibid., 爾來詩と哲學さを結合しやうと云ふ奇妙な混亂 つたが、Wordsworth を讀んで頭を鈍らされ、 でない。Millは、嘗て非常に力强い哲學者であ 為ない。 茂して、 (imagination) を解説して居る。Coleridge の神秘論は、Bowring Bentham の信條を抛棄して、 Coleridge 話中に、 辯の一大流出に過ぎない。夫れには何の意義 到底理解し難き所であつて、其特色も空虚な 從て 彼の Mill 视がある。彼は Mill を輕 哲學の變節漢とした。即ち は、Bowringを悩ませること妙少 Mill が近頃唱道して居る「想像」 Mill は の信條

更に一八四一年以後の女史の日記を尋ねてい 稿を結ぶこととする。 此日迄が、 Mill に關して敍述した總ていある。私は、 一八四〇年の日記中に Fox 女史 本

> チュード ト兩朝に於ける工業政  $\stackrel{\bigcirc}{=}$ Jν スチュア

## 壽

引たる ば、茲にはエリザベス朝時代の工業組織より述 發達と共に他の機會に於て<br />
略述したることあれ について、近世英國に於ける最始の對外的大収 たるが、特に當時の基本工業たりし毛織物工業 工業及對外的貿易の進捗者となり補助者となり **+國は資本主義的利益即先づ第一に資本主義的** 既にソム Merchant **11**18 の述べたる如 Adventurers による貿易の 近世專制君

~" ス 朝時代に於ける新經濟事情の本質

二階級の間に於ける總べての紛議の背後に横は 行はれ、 る根本的經濟事情である。 合内に於ける工業的利益及商業利益を代表する 録に多さ、 る。大工業をして遠隔の市場と接觸せしむ ザベス朝以後、 市場を發見するに、 相接觸せずして、 こどゝなつた。 必要なる經營能力は益々一の商人階級によ 貨物の 介者の資本に依頼するに到れることは、 ②同工業に關する二個の 親方工匠は生産の遂行にのみ事心する 生産的職分と (1)都市工匠を其都市 チャ 斯くて工匠が最早消費者と直接 自己の商品或は仕事に對する ールス一世 分配的職分の 或は直接雇主としての 時代に到る諸記 郊外の工 匠との (3) 同 組 л, () 12 る IJ

するを適當とする。特に Clothworker's Company ロンドンに於ける大組合を採りて其組織を檢 而して、 エリザベス朝以後の工業組織の變遷

> の記録は其當時の代表的組合の組織作用の完 なる説明を與へる。

employerである。第三は之等、 を輸出商人に賣却するを專業とする Merchant 入れ洗張工、仕上工等を雇ひて之を仕上げ、之 賣却することもある。 第二の階級のものは、 斯る業のなき時は、<br />
些かの資金或は<br />
信用を有す 含の機業家 (Clothier) より、 るものは織物を購入し、 り、一般に他の組合員によつて雇傭せらるるも、 出に向く る商人である 組合中にて分たるべき三個の主たる階級があ 第一は洗張工、仕上工等の親方工匠より成 之に手を加へて商人に 未成品の織物を買 既製の織物を輸 田

に非ず、他に多くの小賣商も存在するも之は暫 かを見たいと思 ~ 措き以上の三階級が如何なる利害關係に立つ 右の三階級を以て同組合全員を盡したるもの

スチュアー

ト兩朝に於ける工業政策